

# 治験センター NEWS

第17号 2011年4月1日

4月になり、新年度を迎えました。今年度入職された方も多くいると思います。年4回発行の“治験センターNEWS”をよろしくをお願いします。

さて、治験は患者さんを中心に、実に様々な職種のスタッフが関わっています。中でも看護師は、治験薬の服用管理や注射の実施、バイタルサインや症状の観察など患者さんに直接関わる職種です。今回は、本院・分院それぞれの病棟看護師から日頃治験に関わって感じていることを寄せていただきました。

## 今回のテーマ『治験に関わって～看護師の立場から～』

### 本院8階病棟 さいとうあやこ 齋藤明也孔さん

治験の患者さんが入院されてくると、正直大変だなと思います。時間で決められた治験薬の管理、採血が待っているからです。一つでも間違えると、このデータを使うことができないと聞いているので、責任重大です。それでも、このデータが生かされ、いつか新薬が世の中に出てくることを思えば、チームメンバーも一丸となって、漏れのないように注意して行っています。治験コーディネーターの方も何度も病棟に様子を見に来てくれるので、相談しながら行なうことができます。無事患者さんが退院した時はほっとしますし、間違えずにできたという、ちょっとした達成感もあります。

治験は患者さんにとって大きな挑戦だと思います。以前入院された患者さんは、治験薬が本物かプラセボか、どれに当たるか分からないという状況でした。本物に当たったとしても副作用も分からない中で、不安も強かったと思いますが、前向きに治験に取り組まれている姿に、患者さんは治験薬に期待しているのだろうと感じました。きっと新薬が出てくることを心待ちにしている患者さんが、たくさんいらっしゃるのだろうと思います。そう思えば、責任重大なこの仕事も、頑張ろうと思えます。

患者さんと治験に関わった人達の努力が生かされ、一つでも多くの新薬が生まれることを願っています。



裏に続く

## 分院 3号棟 2階病棟 いわぶちともひろ 岩淵智裕さん

当病棟はC型肝炎や肝硬変、肝癌に対する治験を目的とした入院患者さんを受け入れています。現在ではC型肝炎に対するペグインターフェロン＋リバビリン併用療法は一般的な治療になりましたが、数年前には当病棟でもその治験を実施していました。実際に関わった治験薬が承認されて新しい治療法で患者さんの病状が回復する姿をみていると、嬉しさややりがいを感じますし、看護師として治験に関わることの意義、役割について改めて考えさせられます。

私達が最も気を遣っているのは患者さんが安心して治験に参加できるようサポートすることです。そのためには私達自身が治験内容について理解し、治験薬投与や血中濃度採血などの治験スケジュールを遵守することが必要不可欠です。

治験を開始する段階になるとCRC(治験コーディネーター)から病棟スタッフに治験の目的、治験薬の投与方法、血中濃度採血などの検査についてオリエンテーションを行なってもらい、治験の目的や内容を理解する重要な機会を作っています。

オリエンテーションが終わると、いよいよ治験が開始されます。患者さんは治験に対する期待の一方で治験薬の副作用やご自身の病気の状態について不安を抱えている場合があります。患者さんの意思を尊重し、安心して治験が受けられるようにCRC、医師、薬剤師とのチームワークが何より大切だと実感しています。

治験は将来の日本の医療を支えるための取り組みであり、日常的に治験に関われることは専門職として誇れることだと思います。今後も他職種とのチームワークを高めながら、病棟スタッフ一丸となって取り組みたいと思います。

### 《おわりに》

病棟では通常業務に加えて、治験特有のスケジュールを実施しています。その忙しい中でも、治験に関わり、治験に参加する患者さんの看護をすることに、誇りややりがいがあると話していただきました。

治験センターでは治験を安全・確実に進めるため、患者さんを中心に院内の様々なスタッフとの連携が大切であると考えます。今後ともよろしくお願いします。



次回は、7月1日発行予定です。

問い合わせ

本院治験事務室 3430 CRC室 3420  
分院治験事務局・CRC室 5317